慈濟

ものがたり

ツーチー　2019年5月　269

●表見返し　文・證厳法師訳・済運　撮影・蕭耀華

自分が悟りを開いてから人を悟りに導けば、無明に染まることはない

大慈悲の心で世の衆生を見て、
大きな智慧で以て衆生の声を聞く。
心が仏法に結びつけば、無明に邪魔されたり、
人の言葉に惑わされることはない。
慈悲で以て苦難の声に耳を傾け、
智慧で以て奉仕すれば、
群衆の中に分け入っても無明に染まることはなく
自分が悟りを開いてから人を悟りに導けば、法喜に満ちる。

目次

【社論】
隔たりをなくして共通意識を持つ　慈願／訳　4

【主題報道】
外国人労働者の健康を守る　済運／訳　8
駅ロビーに日曜病院　黒川由希／訳　18
他人を助けることは己をも助けること　惟明／訳　34

【お阿板さんが法の香に浸る】
いつも心楽しく正しいことに励んでいこう　高雪白／訳　42

【慈善国際】
本当のアフリカへようこそ　黒川由希／訳　44
教室外の教室　黒川由希／訳　56

【親と子と教師、三者の本音】
時代が変わってもまだ昔の自慢話ですか？　本諦／訳　60

【證厳法師のお諭し】
衆生と清らかな縁を結ぼう　慈願／訳　64

【衲履足跡】
良い細胞を育てる　済運／訳　70

【百の流れは海へと帰る】
呼吸しているだけでも感謝すべき　常樸／訳　77

【骨髄バンクで繋がる愛】
病と共に生きる　葉美娥／訳　80
素晴らしい人　明陛／訳　90

【聞・思・修】
「捨」の練習　慈願／訳　94

【真心あふれる映像】
花蓮の皆さん、お元気ですか？　閻麗妮／訳　104

慈済大記事【四月】　済運／訳　107

表紙

２０数万人に及ぶ外国人労働者は台湾で介護の仕事をしており、公園でよく車椅子を押す姿を見かける。日夜お年寄りのケアをしているが、彼女たちの健康にも気を配るべきである。（撮影・蕭耀華）

社・論

隔たりをなくして共通意識を持つ

◎訳・慈願

人通りの激しい台北駅ロビーでは、休日になるとあちこちで外国人労働者が集まって台湾の人と仲良くしている賑やかな光景を目にすることができる。ことさら目を引くのは、慈済ボランティアが健康診断コーナーを設置し、彼らに健康診断を勧めていた光景である。

これは北区慈済人医会が提供している活動で、二〇〇四年より十五年間持続しており、凡そ二ヶ月に一回行われている。政府機関と共同で、台北駅が決まった場所になっている他、徐々に屏東、高雄など外国人労働者の多い自治体で行われるようになり、今では南投の移民収容所でも行われている。

一九八〇年代から台湾の国民所得が増加すると同時に産業構造が変わり、労働集約型伝統産業で必要とする人口は減少したが、それでも相変わらず労働力は不足に傾いた。相対的に安い労働力を求める為に、台湾は遂に一九九〇年から外国人労働者を受け入れ始めた。

外国人労働者は東南アジア諸国からが最も多く、去年末には七十萬人を突破した。平均すると台湾に住む人の三十四人に一人が外国人労働者になる。

外国人労働者は、家庭や施設での介護の仕事、建築現場、製造業、漁業の働き手となり、少子化と高齢化の台湾社会において大きく貢献をしている。しかし、社会階級や文化の相違の状況下、外国人労働者の労働条件は相対的に厳しく、健康面でもリスクが大きくなっている。

彼らと雇主は法に従がって健康保険料を納めているが、医療の受診状況は台湾労働者に比べると明らかに少ない。労働時間が長い上に決まった休みもなく、更に仕事がない時など、様々な要素が重なって医療保障を得るのが難しくなっている。

今期の主題報道にあるように、慈済人医会の施療では多様な診療科を提供して、たまにしか無い休日を押して来る外国人労働者の待ち時間を短くするようにしている。東南アジアの留学生も含めて中国語が話せる人は通訳を申し出る他、仲介業者が外国人労働者を連れて診察に来たり、ボランティアを申し出る人もいる。

一般的な西洋医学以外に心身医学科及び漢方科も増設し、より多くの選択肢を提供している。文化的背景の違いから診察者が少ない産婦人科の場合、医師の問診の後にボランティアが付き添って診察や詳細な検査を行う。

外国人労働者の施療は、実業家で慈済ボランティアの黄秋良の義父を介護していたフィリピン籍のペムの提案の下に企画された。ペムは何度も黄秋良について慈済の活動に参加しており、国際人医会がフィリピンで施療を数多く行ってきたことに感謝すると共に、偶然に外国人労働者の嘆きを話したのがことの始まりだった。

施療に参加した薛俊福医師は、故郷を離れて異郷の見知らぬ家庭で働く外国人労働者を尊重すると共に関心を抱き、互いに隔たりなく共通意識を持つことで、相互福祉を促進すべきだと言った。（慈済月刊六二八期より）

◀15年来、北区慈済人医会は2ヶ月に1回、台北駅で外国人労働者を対象にした健診施療を行っている。平日、診察に行くのが困難な外国人労働者は休日を利用してここで多数の科の診察を受けることができる。眼科の診療区域で、医師が外国人労働者の目を仔細に検査していた。（撮影・陳李少民）

主題報導

外国人労働者の健康を守る

文・黄沈瑛芳　訳・済運

外国人労働者は既に台湾の基礎労働力になくてはならない存在となっており、産業と長期ケアを必要とする家庭を支えている。彼女たちが台湾で働く最大の動機はお金を故郷に送ることであり、そのために長期に渡って家族と離れ離れになることを我慢しているため、大きなプレッシャーを感じながら生活している。彼女らの立場になって支援すれば、私たち自身を助けることにもなり、相互扶助の関係を築くことができる。

●外国人労働者は休日に台北駅に集まる。慈済ボランティアのベストを着た各国の労働者は無料健診に参加するよう同郷に呼びかけた。（撮影・陳李少民）

日曜日になると台北駅ロビーのタイル張りのフロアに大勢の若い男女が座って手振り身振りを交えながら談笑している。中にはギターを抱えて流行歌を歌い、蝋燭が灯されたケーキで友人の誕生日を祝っている人たちもいた。ひっきりなしに行き交う人々は彼らの言葉と鮮やかな色の伝統衣装に好奇の目を向ける。

「慈済が無料診察を行っています。皆さん健康診断に来てください！」と一目で外国人と分かる人たちがボランティアベストを着て、インドネシア語や英語で熱心に群衆に呼びかけていた。何人かがロビー西側に設置されたクリニックに来ると直ぐに案内の人が出て来て、「番号札を取ってください。初めての方は問診票に記入してください。後で身長、体重、血圧を測ります」と説明した。

北区慈済人医会は二ヶ月に一回、台北駅で外国人労働者を対象にした施療を行なっている。日曜日の午後一時頃になると受付に来る人が増えてくる。彼らは必要事項を記入した問診票を持ち、ボランティアの誘導に従って一般的な検査を行った後、希望する科へ移動する。

台湾で介護の仕事をして七年になるユリは、何度も診察に来ているそうだ。「こういう活動は私たちに取ってとても助かります」。彼らは毎月決まって休みがあるとは限らず、普段病気になっても、雇用主は忙しいために彼女たちを医者に連れて行くことができず、かといって自分で勝手に医者に行くこともできない。従って、施療を行っている日曜日であれば、ついでに目や歯の検査も済ませることができるという。

ユリは「遠く故郷を離れた台湾に来ても、こんなにも私たちのことを思い、医師もボランティアもとても親切にしてくれるので、本当に心温まります」と強いインドネシア訛りの中国語で言った。

ユリは医者にかかる以外に、同郷のために通訳をしている。彼女たちは大方、台湾でお年寄りの世話をしており、夜中に目覚めるお年寄りに付き添うため、寝不足でいつも疲労感が伴うそうで、体が不調な時は自分でマッサージするしかない。「特にそういう時はホームシックになります」と感傷的になった。

二度目、台湾に来たファーラーは次の雇用主を待っているところだった。彼女

の故郷はインドネシアのスラバヤで、仕送りして子供たちにもっといい生活をさせてあげたい、と思っている。彼女は前にも診察に来て、皮膚の病気は医師が処方してくれた薬で大分よくなったそうだ。また、胃の調子がよくなかったので、「医師の問診で朝はコーヒー以外に何も食べないのがよくないことが分かり、習慣を変えるようアドバイスを受け、今は大分よくなりました。一番役に立つのが内科です」と言った。

彼女によると、インドネシアでは医療費が高いため、ちょっとした病気なら我慢する人が多く、家庭が貧しい人は医者に掛ることができない。台湾では職種に制限はあるが、「医者に掛かれることが実に素晴らしいのです。体が楽になります」と流暢ではないが、意思の疎通ができる程度の中国語で言った。

ファーラーによると、彼女たちが休日に行こうと思っても病院は休みで、日曜日に行われる施療は彼女たちにとって格別に重要である。こんなに多くの台湾の医師や看護師、ボランティアが彼女たちのために奉仕してくれることを有難く思い、「慈済は私たちの休日に合わせているのだと思います。本当に感謝しています」と言った。

同じ地球上に生きる

台湾が外国人労働者を受け入れてから二十年以上になる。その数は二〇一四年には先住民の人口を上回り、二〇一八年末現在で七十万を超えた。台湾の人口で三十四人に一人が外国人労働者の計算になる。そのうちの二十数万人が介護の仕事に携わっており、台湾の長期ケア体制に欠かせない人力となっている。

出稼ぎ労働者が軽視できない労働力となり、それに伴って益々増える異なった顔立ちの人に接して、大衆は相手の立場になり、互いに理解し、学び合って共に暮らしていく心の準備ができているだろうか？

慈済人医会は二〇〇四年から外国人労働者のケアを始め、彼らが多く集まる台北二二八公園と聖多福天主堂で不定期の施療活動を行った。二〇〇五年、台北市労工局と健保局の協力を得ると共にラジオで情報を流した。慈済は定期的に二ヶ月に一回、台北駅で「台北市外国人労働者

統計

台湾における外国人労働者

- 計706、850人
- 台湾の人口の34人に1人が外国人労働者。
- 台湾で受け入れている外国人労働者の職種・家庭での介護及び家事手伝い、介護仲介業者の介護専業職、製造業、建設業、漁業、家畜屠殺場。
- 全体の37パーセントが介護の仕事で、「社会福祉労働者」に属し、63パーセントが「産業労働者」に属している。
- 労働者の主な国籍・インドネシア、イリピン、タイ、ベトナム。

（資料の提供・労働部、2018年末現在）

向け健康ケア及びこの世に愛を広める」活動を始めた。今年で十五年目になる。

今では台北駅で定期的に外国人労働者の健診と施療を行なっているほか、慈済人医会は新北市、桃園市、南投県、高屏などでも外国人労働者に対する施療活動を行っている。新北市政府前広場では新北市労働局と慈済人医会が協同で、インドネシア、タイ、ベトナム、フィリピンの祭日に合わせて、一年に四回労働者の健診を行っている。また、屏東東港と漁船乗組員の数が最も多い高雄前鎮漁港では、南区の慈済人医会が施療と衛生教育をすることで、異国で漁業に携わっている人たちの健康を守っている。

休日に行われる健診活動は小規模な病院を会場に持ち込んだようなもので、歯科、眼科、整形外科、漢方科、一般内科及び診察受付、血圧や体重の測定、と完備されている。また、労働者を心身共にケアするため、医療スタッフもボランティアも精一杯奉仕して健診活動を一体的に催し、介護作業に携わる女性たちは台湾の家庭を守ることで、互いに助け合っているのである。

（慈済月刊六二八期より）

駅ロビーに日曜病院

日曜日の台北駅ロビーの一角には外国籍労働者のための移動病院が開設される。二ヶ月に一度、すでに十五年も継続している。受診する数の制限はなく、通訳ボランティアも付いているため、言葉の不自由もない。

文・黄沈瑛芳　撮影・陳李少民　訳・黒川由希

●外国人労働者が受付に列を作り、慈済ボランティアと各診療科の看護師たちが丁寧に説明していた。

「私は一生懸命おばあさんを介護しているのですが、いつもおばあさんに罵られます。私が物を盗んだと言って……」。台北駅の外国籍労働者健診エリアで、心療内科の李嘉富医師が労働者のシー（Shi）の悩みに耳を傾けていた。在宅介護師のシーは熟睡できず、気持ちが沈む状態が続いていた。「私のどこがいけないのでしょうか」と彼女は李嘉富医師に尋ねた。

「おばあさんには病気があるからこそ、あなたの手伝いが必要なのです。おばあさんは記憶力が低下していて、自分で置いた物を移動させたことを忘れてしまい、家にはあなたしかいなかったため、あなたが盗ったのだと思って怒ったのです」と李嘉富医師は彼女を諭した。

心療内科の診療に訪れる労働者はいずれも仕事によるストレスを抱えている。李嘉富医師はまず話を聞いて、彼女らのわだかまりを見つけ出し、じっくり話し合ってストレスを取り除いていく。また簡単な検査機器で自身の心身状態を理解してもらっている。

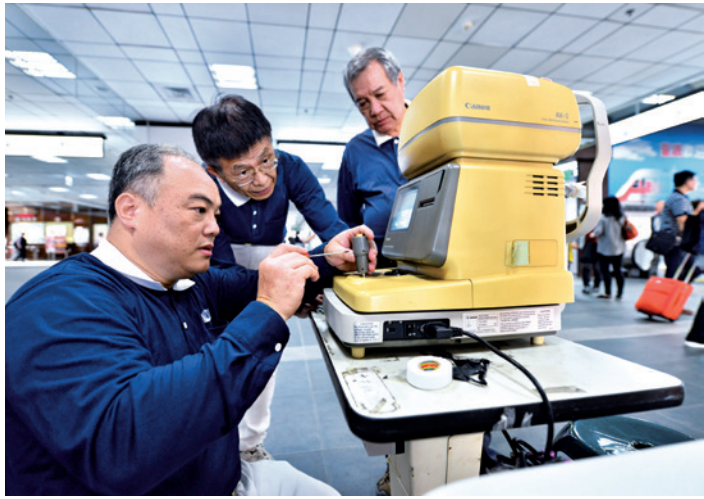
台北慈済病院心療内科の李嘉富医師は外国籍労働者の健診に携わって十年以上になる。二〇〇一年、国防医学院で教鞭をとる妻の陳嘉琦と共にアメリカで研修した際、見知らぬ海外で苦労を味わった。台湾に戻ってから慈済人医会による外国籍労働者や移民を対象にした奉仕活動が行われることを知ると、彼は直ぐに賛同し、二〇〇四年から現在まで活動に参加し続けている。

●長年、外国籍労働者の施療に携わってきた台北慈済病院心療内科の李嘉富医師は、新北市庁舎での健診で外国籍労働者の話に耳を傾けていた。（撮影・張嫦娥）

仕事上のストレスを思いやる

台北市中山北路にあるセントクリストファーズ教会には休日になると決まって

●使命に忠実な後方支援チーム。歯科の水道電気配線仮工事は複雑で、専門性が要求される。医師が診察の際、移動の邪魔にならないようボランティアたちは慎重に配線した。



●機械配線チームのボランティアは無料診療現場で事前に設備を組み立て、終了後は慎重に分解する。それは正に「先頭に立って、最後までやり遂げる」姿である。

外国籍労働者が集まってくる。二〇〇四年から、慈済人医会は台北市労工局と協力して外国籍労働者の健診と相談を開始した。休日の教会の外では、医師や看護師、ソーシャルワーカー等の専門スタッフが寛いで談笑する東南アジアの人々の間を行き来する。李嘉富医師が診察する時、陳嘉琦は現場で衛生教育のビラ配りをする。

長年、外国籍労働者の心身の施療に携わってきた李嘉富医師は、高齢者や病人を介護する外国籍労働者は体力を使う

●設備の整った歯科診療室は施療の診療科の中でも一番忙しい。医師と助手が労働者の口腔問題を解決している。（撮影・蕭耀華）

外国籍労働者の健診者数が多い診療科

▼漢方科：針灸、推拿で肉体労働による筋肉のコリをほぐすことができる。
▼歯科：母国では歯のスケーリングや口腔治療は贅沢である。
▼眼科：長期間、スマホを使って家族と連絡していることが視力に影響している。

だけでなく、生活や言葉、文化の違いに直面し、その精神的ストレスは計り知れないと話す。心療内科を訪れる労働者は医療サポートを求めて来るとは限らず、誰かが関心を示し、心に溜まったストレスを発散できることを望んでいるのだ。

「彼らは毎日、仕事でミスをして解雇されまいかとビクビクしているのです。角度を変えて見れば、彼らがこんなにも心を込めて私たちの家族を介護してくれているのですから、私たちも同じような心で彼らに接すれば、彼らはきっといっそう努力してくれるでしょう」と李嘉富医師が言った。「労働者の心身ケアがなされていない場合、何か問題が起きた時には社会がその責任を負わなければならなくなります。彼らに『異郷が故郷になった』という思いを持ってもらうことは社会皆の責任だと思います」。

心療内科の問診中、李嘉富医師はストレスを緩和する方法を教えると共に、在宅ケアボランティアと労働者の交流を呼びかけている。在宅ケアボランティアは専門的なトレーニングを受け、長年高齢者の在宅ケアに携わってきており、台湾のお年寄りの気質を比較的よく理解している。その高齢者ケアの経験を話すことで、移民労働者たちの仕事のストレスを減らすことができれば、お年寄りとの関係をより良いものにすることができるのである。

筋肉のコリは漢方医が専門

駅ロビーの北門の近くは行き交う人が多く、柱に「漢方医学」の看板が掛かっていた。邱偉源医師は初めて針灸治療を受ける労働者の男性に針を刺しながら、「痛くない、痛くない……OK、痛くなかったでしょう?」と話しかけていた。傍の通訳ボランティアも気遣いの言葉をかけた。

心療内科の医師が労働者の精神的ストレスを緩和する以外に、漢方医が行う針灸や推拿、湿布も筋肉のコリをほぐすと多くの人から歓迎されている。

「仕事のため、彼らは毎回、施療に来ることはできません。しかし、針灸を施すと『あれ、痛くなくなった』と驚くことがよくあるのです。彼らの反応で体が楽になったことが分かります。これが何より嬉しいことです」と漢方医の陳秀鑾医師が言って微笑んだ。

台北駅外国籍労働者健診で漢方科が設置された当初から陳秀鑾医師は参加しているが、ここに集まる在宅介護に従事する人はインドネシア人が最も多く、フィリピン、ベトナム、タイからの人もいることを知った。台湾で長く働いている人は多くが簡単な中国語を話せ、医師やボランティアとコミュニケーションを取ることができる。言葉が通じなくても、通訳ボランティアのサポートがある。

土城に住む陳秀鑾医師は施療の時はバイクで往復する。彼女は労働者健診施療を自分の務めだと思っており、「労働者の健康を守り、彼女たちが元気で高齢者を介護することができれば、双方が喜ぶはずだと思います」と言った。

●針灸に馴染みが薄かった外国籍労働者も、医師の施術で症状が緩和すると再診を希望するようになる。

口腔のトラブルを歯科医が解決

健診現場では、歯科チームの人数が最も多く、患者の数も一番多い。椅子をずらっと並べた施療では毎回、少なくとも五、六名の医師が約七十名の患者を診療する、と歯科助手の游春美が言った。歯科助手も各種機器、薬品、衛生機材やマスク、手袋などの消耗材の準備に忙しい。

歯科医は歯のスケーリング、虫歯治療、抜歯など口腔の問題を解決する以外に、衛生教育も行っている。「歯石がひどい

外国籍労働者の医療アクセス上の問題

- 仕事のない休日は診療所や病院も休診する。
- 医療スタッフとの間に言葉の壁がある。
- 保守的な国柄のため、特に女性は病気を隠し、診察を避けがちになる。

上に虫歯にもなっていましたよ！」治療が終わり、医師から鏡を渡された労働者は鏡に映った自分の真っ白な歯を見て嬉しそうに笑い、医師のアドバイス通りに毎日歯磨きすることを約束した。

ボランティア医師たちは無料診察するだけでなく、必要な備品も提供して治療に当たり、無料奉仕でも忍耐強く続け、い

い加減に済ませることはなく、行動で誠実な心を表している、と游春美が言った。

游春美は主婦だが、慈済に参加して初めて「仕事」するようになった。毎日、煩雑な物事を処理しなければならないが、体は疲れても心が疲れないと言う。「海外の施療活動に参加した際、患者さんがとても多く、全ての人を診療する時間はありませんでした。ある医師が涙を流しながら『苦難に喘ぐ人が多過ぎて、一、二ヶ月留まったとしても、全ての人を診ることはできません…』と私に言いました」。医師の慈悲心に深く感動した彼女は、それ以上泣き言は言わず、逆に奉仕できることに感謝した。

経験豊富な看護師の張永隨は各診療科を巡回し、人手が足りないところを手伝った。台大病院に勤務していた時に北部慈済人医会に加入し、外国籍労働者の健診に携わって既に七、八年になる。退職後は台北駅施療健診で看護師連絡窓口を受け持っている。

現在、歯科には専属チームがあり、一般診療科の看護師はアテンダントで、眼科の場合は検査機器を使用できなければならないと張永隨が説明した。各診療科にはそれぞれ専門性があり、誰でも務まるわけではない。充分に適切な人材を確保するのは容易ではなく、彼女もプレッシャーの大きさから辞めようかと考えたこともあるが、後に「奉仕の機会を与えてくれた外国籍労働者に感謝しなければ」と考え方を改めた。

「誘い合って皆で善行することに法悦

を感じ、外国籍労働者をサポートして困難を解決できれば、嬉しくなります。高齢の自分がまだ、良能を発揮できることに充実感を覚え、脳の退化を防ぐことができるのです」と彼女は心から言った。

産婦人科だけの特別診察

東南アジアは比較的保守的な国柄であるため、産婦人科に来る人は多くない。それでも産婦人科の頼英明医師は長年、施療現場で時間を厳守して持ち場を離れず、問診に来た女性労働者たちに衛生教育の常識を提供している。

「パップテストは必ず受けなければいけません。子宮頸がんを早期に発見できるからです。炎症があった場合は外用薬や坐剤で治療できますが、その他の症状が出た場合は直ちに病院で精密検査を行えば、病気をこじらせることはありません」と頼英明医師は強調する。

外国籍女性労働者に寄り添うために、彼は医学用語を各国の言語でノートに書きとめ、問診時に患者に見せる。そうして問診すると、彼女たちの問題をおよそ把握することができる。外国籍労働者の施療活動に参加して長い頼英明医師は、彼女たちが介護する高齢者への労りの気持ちがよく分かる。数年前、彼自身の母親が病気になり、外国籍介護師にケアを頼んだことがあり、いっそう彼女らの苦労を理解するようになった。

「異郷で働き、病気になった際には誰かにケアしてほしいと願うものです。同胞であろうとなかろうと、医師なら必要とする人をケアしなければなりません。たとえちょっとした一言でも、人に温もりを与えられるのです」。

頼英明医師の問診後、数名の女性労働者はボランティアの車に乗り、永和区方面へ向かった。車が成功路にある産婦人科の前に停まり、中に入ると既に数名の

2019年度
外国籍労働者に対する施療活動　北部

台北市

4月28日、6月16日、8月11日、10月20日、12月8日 12：00～16：00

台北駅西一門口から北三門口

新北市

4月14日（タイ）、6月9日（フィリピン）、9月29日（インドネシア）12：00～15：30

新北市庁舎広場
（変更があった場合、市政府ウェブサイトで告知）

フィリピン、ベトナム、インドネシアの女性労働者が診察を待っていた。

休日にもかかわらず、薛俊福医師と診療所の看護師は忙しく患者に対応していた。台北駅の施療会場にはパップテスト関連の設備がないため、薛俊福医師は労働者を自分の診療所に転送させたのである。台湾にやって来た労働者たちは、風土や飲食物に慣れなかったり、生活上のストレス、緊張などから生理不順を起こすことがあると薛俊福医師は言う。

検査後、今後連絡が取れるようにと、薛俊福医師は患者に机の上書かれたQRコードをスマホにスキャンしてもらった。「今日、パップテストを行い、外用薬をお渡ししました。また、二回分の座薬の使用方法をよく覚えておいてください」と丁寧に説明した。

ある労働者は、介護しているおばあさんから指輪をもらったが、本物かどうか分からない、と薛俊福医師に話した。彼は、「本物かどうかは関係ありません。おばあさんの心遣いですから、大切にしてください」と言った。

薛俊福医師は、「労働者たちは遠路海を越え、自分の家庭や子ども、両親を残して台湾で私たちの面倒を見てくれているのです。彼女たちを思いやり、尊重して接してあげるべきです。そうすれば、彼女たちもきっともっと私たちのために努力してくれるでしょう」と言った。

薛俊福医師の診療所を後にし、ボランティアは労働者たちを連れて台北駅に戻った。施療は既に終了し、皆で後片付けをして帰るところだった。温かな思いやりや愛の心は冷めることはない。最後は皆二ヵ月後の再会を約束して家路についた。（慈済月刊六二八期より）

●女性の外国籍労働者に産婦人科の検査が必要だが、台北駅はオープンスペースの上、関連機器がないため、看護師とボランティアが付き添って薛俊福医師（右から三番目）の診療所に行って検査を受けた。

他人を助けることは己をも助けること

異郷で働く人は経験から、健康で働けることと、無事に帰国できるのが何よりだとよく知っている。平日に車椅子を押す手で、休日にフリップを持ち、彼女たちは言語を駆使して橋渡しになり、「雇用主のお年寄りを世話する時は自分の健康も守らなければいけない」と同胞に呼び掛けた。

文・黄沈瑛芳　訳・惟明

台北市萬華にある派遣業者の教室に、約二十人が受講していた。テレビ画面では、ある外国人労働者が受診の手遅れで仕事が続けられなくなったドキュメンタリーを放映していた。彼女は夜間に倒れ、病院に緊急搬送された。重体で入院後、直ぐに気管挿管を余儀なくされた。その後の検査でガン細胞がすでに転位していることが分かり、手術を受け、暫く間を置いて再度大きな手術をした後、最後には自国に返され、間もなくして亡くなった。

講義を聞いた中で悲しみを覚えた人もいれば、余り気にならない人もいた。彼らが初めて台湾に入国した時や新しい雇用主の下で働くことになる時、学歴と経歴豊富な人や学歴の高い外国人労働者が講師になって指導するのは、雇用される家でできるだけ早く慣れることを目的にしている。

毎日同じようなビデオを流して、外国人労働者に自分の健康に気配りしてもらっている、と派遣業者の林和蓁總經理が感慨深げに言った。外国人労働者は最長十四年間台湾に滞在でき、大半が基礎的な労働に従事しているので、滞在中、健康に異常をきたすことがよくある。台湾は既に外国人労働者を健康保険の対象に入れている。派遣業者は、合法的な仕事につけば健康保険が使え、安心して病院に行って診療を受けられることを彼らに理解をしてもらっている。逆に、合法的な仕事でなければ、医療保障を受けることができない。

台湾では外国人労働者は定期的に健康診断を受けることを法で定めている。初めて台湾にきた外国人労働者は言葉の壁があり、ちょっとした風邪なら自分で診療所に行けるが、病院に行くようなことになれば、派遣業者から通訳が同行する。

特に東南アジアからの就労者は比較的に保守的で、女性は特に医者の性別が気になるため、安心して診てもらえるよう注意を払っている、と林和蓁が説明した。

治療よりも予防

台北駅で慈済の外国人労働者向け無料健診活動がある時、林和蓁は必ずボランティアベストを着て、他の外国人就労者を伴って、彼らの同郷者に健診を呼びかける。長い間、行って来て慣れているため、今では必ず、駅の周りでも呼びかけている。

「健診活動がある度に、会社は事前に雇用主に連絡し、外国人労働者の具合が少しでも悪ければ、来て診てもらうのがベストだと教えています。雇主にとっても彼らが健康でいるのはいいことなのです。そして、彼らが休日にボランティアをすると同時に健診を受けられるのはいいことです」と林和蓁は言う。外国人労働者にとって診療を受けるのは面倒なことで、台北駅だったら便利である。特に、平日に病院へ行くのは時間制限がある上に、一つの科しか診察できない。慈済の無料健診に来れば、少なくとも五科以上診察を受けることができる上に、待ち時間は短く、無料である。

林和蓁は慈済との縁を話してくれた。

遡ること二〇〇七年、インドネシアから来たリアが会社最初の癌のケースだった。治療が一段落した後、自国に戻ることになり、林和蓁は台北市労務局に、彼女を続けてケアする組織がインドネシアにないだろうかと問い合わせた時、インドネシアには慈済の支部があるので、聞いてみたらという回答を得た。

林和蓁は早速、慈済台北支部に連絡を取った。黄秋良などのボランティアが帰国間近のリアを見舞いに来て、リアのケースをインドネシアのボランティアに

●お昼頃、台北駅の外で外国人就労者の弁当売りが行き来し、慈済ボランティアは外国人就労者を無料健診に招待した。（撮影・蕭耀華）

引き継いでもらった。それがきっかけで台北駅で外国人就労者向けの無料定期健診があることを知り、会社の外国人労働者講師が慈済と協力するようになった。

統計によると、外国人労働者が怪我や病気、障害を負ったり死亡するなどの突発事故は年間平均して千五百件に上る。二十年以上、派遣業に携わってきた林和蓁は、それと類似したケースを多く見てきたため、外国人労働者に医療知識を教育することに力を入れてきた。「慈済の無料健診は治療よりも予防の効果を発揮できるのです。普段の軽い病気だったら少し我慢すればいいのですが、休みを利用して仲間と台北駅に集まった時に、慈済の無料健診を受ければ、健康で安心して帰れるのです」。

●毎回台北駅で無料健診がある時、林和蓁（前列左から二人目）は会社の外国人就労者講師を連れて、行き来する外国人就労者に健診を呼びかけている。（撮影・陳李少民）

苦労には相応の見返りがある

今、外国人労働者の講師を務めるインドネシア国籍のアシャーは二〇〇二年に二歳の子供を自国に残し、初めて介護士として台湾にやって来た。最初に雇用された新竹の家族は十八人家族で、彼女はお婆さんの世話と食事の支度、子守など、とても大変だった。しかし、アシャーは自分の家庭環境を変える決意をした。絶対に失敗してはならず、どんな難関に直面しても乗り越えて辛抱しなければいけないと自分に言い聞かせた。そのようにして、その雇用主一家も彼女を可愛がった。

外国人労働者は三年ごとに出国しないといけないが、二回目に来台して三年に満たなかった時、お婆さんが亡くなったため、アシャーは転職した。彼女は高校の学歴を持っていたので、派遣会社の講師になり、台湾での生活は十数年になる。

外国人労働者にとって最大の働き甲斐はお金を貯めて自国に送金することであ

る。送ったお金で家を建て、子供を大学まで出させたことはプレッシャーを背負った末の、最大の見返りである。「人を助けることは自分をも助けることになるのです。苦労は、必ず報われると信じていました」とアシャーは笑顔で話した。

振り返ってみると、在宅介護の仕事をしていた間、アシャーはあまり休暇を取ったことがない。彼女は簡単な中国語が話せたので、少し風邪をひいて近所の医者に診てもらった時、余り問題はなかった。しかし、非合法外国人労働者は病院に行くことを恐れ、軽い病気が重いものになった事例を沢山見てきた。そのため、彼女は仲間に合法的就労の重要性を強調すると共に、具合が悪くなったら医者に行くことを雇主と相談するよう助言している。「台湾にはこんなに良い医療制度があるのに、受診が遅れたばかりに残念な結果になり、心を痛めてしまうのです」。

アシャーが新竹で世話していたお婆さんは大愛テレビの番組をよく見ていたので、彼女も慈済のことを知るようになった。外国人労働者の講師になった後、時間を自由に使えるようになったため、慈済の活動に参加する夢が叶った。「善行したいのです。ましてや、同胞のインドネシア人に受診を呼びかけ、皆が自分の健康に注意してもらう仕事なのです」。

彼女は通訳のボランティアになって台湾人の善良さに接し、人助けの喜びを実感した。「愛は民族や宗教を問わず、皆が実行すれば、社会は平和になりますと證厳法師は語っています。良い信念はポジティブな力を発揮します。私は講義の時に皆と分かち合い、これからもずっと続けていきます」

●

「介護に携わる外国人労働者はその家庭に溶け込んで病人の世話をする必要があるため、仕事の環境が閉鎖的で、重いプレッシャーが掛かります。介護していた人が亡くなれば、直ぐに新しい雇用主を探すことになりますが、それに合わせ

2018年慈済の外国人就労者向け無料診察

場所と対象者	回数	診察延べ人数
台北市、新北市、桃園市外国人就労者	10	3013
入出国管理局南投収容所	11	605
屏東東港外国人漁業就労者、高雄前鎮外国人就労者	3	2276
蘇澳外国人漁業就労者	1	365

て素早く気持ちの調整をしなければならないというのは容易ではありません」。

遠い所から来たこの子たちが、家庭の重責を担ってくれることで、雇用主の生活が改善されるため、有意義な仕事だと林和蓁も思っている。「善意を持って外国人労働者に接すれば、彼女たちも必ずそれに報いてくれます。『捨』があれば『得』るものがあります。善の起点は利己利他の要であり、これこそが前向きな循環になるのです」と林和蓁は言う。

（慈済月刊六二八期より）

お板さんが法の香に浸る

いつも心楽しく 正しいことに励んでいこう

◎文&絵・阿板（凌琪）
訳・高雪白

当初花蓮に帰り慈済志業部で奉仕すると決めたとき、実はとても緊張していた。それがまるで昨日のことのように、五年の歳月が瞬く間に過ぎ去った。少しずつやり続けてきた事が積み重なっているのを実感し、有難く感じている。同時に注意を怠ってはいけないと思っている。時間は戻ることがないのだから。

前に進み続けるため、私はこうありたいと願う。「笑顔を絶やさず心から楽しむ気持ちを持ち続けること。それが仏心なのだから」私の心の中で何度も繰り返される言葉だが、ではどうしたらよいのだろうか。

今日證厳法師のお諭しの中にその答えを見いだした。それは慈悲喜捨の四無量心でいればいい、ということなのだ。

人との関わりに慈悲の心をもって相対すれば、怨みや不満などが起こりうるはずは無い。何事にも前向きな気持ちで喜んで取り組み、やり遂げよう。そして放下を忘れず自分自身に警告し、好きな物を捨てるだけでなく、落ち着きのない習慣も捨てることだ。楽しむ心を持ち続ければ、正しいことに励んでいけるのだから。このような仏心を目標として励んでいこう。（慈済月刊六二六期より）

本当のアフリカへようこそ

歴史の傷跡はいまだ癒えず、
一般民衆の生活は苦しい。
これがアフリカである。
貧しい大地での歩みは
苦難に満ちているが、
それでも
苦難にある人々のもとへ歩み、
貧しい人が貧しい人を助け、
更なる真善美を目指す。
これもアフリカである。

◎文・蔡雅純＆林維揚
訳・黒川由希

台湾を出発してから、乗り換えや待ち合わせ時間を含め飛行機で二十時間をかけ、明け頃ようやくアフリカに到着した。

飛行機がゆっくりと南アフリカのダーバン空港に着陸し、ターミナルビルを出ると、目の前に広がるのは大草原ではなく、整備された道路、現代的な施設、オフィスビル、ショッピングセンターや絶え間ない車の流れだっ

●200名を超えるアフリカ南部8カ国の現地ボランティア幹部が2018年10月下旬、南アフリカでの研修に集まった。（撮影・林岱融）

た。「ここは本当に苦難のアフリカなのか？」思わずそんな疑問が浮かんだ。

しかし華人ボランティアの袁亜棋とズールー人の慈済ボランティアに案内されながら、アフリカ支援チームの一行が車で一時間ほどの距離にあるダーバン近郊に到着すると、目に入るのはレンガ造りの低い建物、ビニルテントを竹竿で支えたマーケット、ぼろをまとった子ども、コンテナを改造した小さな雑貨店だった。コミュニティに足を踏み入れると高齢者と子どもばかり、にぎやかなビジネス街と

●南アフリカのダーバン市郊外の山には貧困世帯が点在し、現地ボランティアが毎月支援に訪れる。台湾の支援チームもともに愛心米を届けた。（撮影・林維揚）

は全く異なる光景が広がっていた。

「本当のアフリカへようこそ。南アフリカの貧富の格差は極めて大きいのです。植民地時代には人種隔離政策が実施されていました。現地の住民は白人施政者の支配を受け、一九九四年マンデラが大統領となった後、人種隔離政策は撤廃され、黒人は平等な待遇を受けられるようになりましたが、歴史の傷跡を癒すにはまだまだ時間が必要で、人口の大多数を占める黒人の生活はいまだ窮乏しています」。現地に暮らしてすでに十三年になる袁亜棋はこう話した。

ンシムービニ・コミュニティには、慈済ボランティアが建設援助したコミュニティセンターがあった。建物の中のしつらえは簡素だが、現地ボランティアと住民の重要な拠点である。十坪ほどのスペースは人々が集会したり、炊き出しを孤児に提供したり、愛心米を貯蔵したりでき、現地ボランティアが国際交流キャンプを行う際には、宿泊施設としても使われる。

小屋のもう一つの役割は、コミュニティのミシンクラスである。現地のズールー人ボランティアは時間がある時に衣類やバッグ、アクセサリーなどを製作し、売上をコミュニティ支援のために使う。長期支援住民のテレサの教会主教であった夫は、證厳法師の大愛の精神に感動し、

教会を建てる予定だった土地を慈済基金会に寄付し、このコミュニティセンターが誕生した。

夫が二ヶ月前に亡くなり、喪に服していたテレサは、台湾からやって来た慈済ボランティアに会うと皆の手を握ってありがとうと繰り返した。この瞬間の魂の交わりは、国籍や種族、言語を超えていた。

炊き出し拠点で自力更生

南半球の十月末は春夏の交代の時期で、気温は高く乾燥している。七十五歳になる慈碧（シビシ）師姐（スージェ）は、近所の五十数名の貧しい孤児や高齢者のため、粗末な露天の厨房でかまどに火を起こし、ご飯を炊き、おかずを作る。

ムカジニ・コミュニティに住む慈碧（シビシ）師姐（スージェ）は、慈済と縁を結んで間もなく二十年になり、自分の家の厨房を炊き出し拠点としている。一見何の変哲もない作業も、実はよく計画されたものだ。定期的にボランティアから受け取る台湾愛心米を、毎週一食分の量に分け、足りないときには自分でパンを焼いて補充すると共に、おかずの種類を豊富にできるよう調理場の近くに菜園も作っている。怪我をして二度手術したことがあるにもかかわらず、慈碧師姐は今でもやはり熱心に人助けに取り組んでいる。

ダーバン市郊外には二百近くの炊き出し拠点があり、それぞれ週に一回から三回食事を提供しており、炊き出しを必要とする人は毎月約五千人いる。わずか十五人の華人慈済ボランティアではまかないきれず、現地ボランティアに頼むほか、住民とともに食材を用意し、自力更生に励んでいる。

二十代のンカラニフォ・マクフヌとサムケリソ・マグワザはダーバン在住の現地ボランティアで、いつもは家庭訪問のプランニングを担当している。

交通の不便な山道を越え、家庭訪問を続けているボランティアの姿に感銘を受けた彼らは、現地の若者を連れ、毎月車で山や谷を越え、車が通れない場所は歌を歌いながら徒歩で支援に通っている。おかげでダーバンの慈済支援世帯はすでに二千世帯を超えた。

帰ったら人々とともに活動

ランセリア国際空港傍に位置する慈済育成センターは、南アフリカ最大の都市ヨハネスブルグにある慈済の新拠点である。華人ボランティア李慶隆が無償で提

供し、日頃は炊き出しや現地ボランティアの会議や修行に使われている。今回、私たちはちょうど一年に一度のアフリカ南部八カ国現地ボランティア幹部の研修キャンプと遭遇した。

南アフリカ、レソト、ジンバブエ、エスワティニ、モザンビーク、ボツワナ、ナミビア、マラウイという八カ国の現地ボランティア幹部が二泊三日の研修課程を行っていた。キャンプの前に周到に準備を整え、宿泊場所を拡げようとボランティアは板でベッドの枠組みを作り、マットを敷いて、シンプルだが温かな宿泊スペースを作っていた。

華人ボランティアと現地ボランティアが毎食二百四十人分の食事を準備し、現地ボランティアはスムーズに講義が進むよう、必要な視聴覚設備、生活物資の準備や清掃も担当していた。各国のボランティアは熱心に研修を受け、誰もが「帰ったら人々とともに活動します！」と話していた。

キャンプでは、ダーバンで会ったことのあるナミビアのボランティア四名に出会った。「慈済は国際バスの費用を出してくれましたが、私たちには自宅からバス停へ行くまでのお金がありませんでした。今回の南アフリカでの精進活動参加

●モザンビークでは毎月生活保護世帯への物資配給を実施している。現地ボランティアは歌を歌いながら一人一人に白米を手渡す。（撮影・蘇柏嘉）

を一度は諦めましたが、亜棋師姐（スージェ）が励ましてくれた上、募金で費用を集め、現地華人ボランティアが移動の間の食費も提供してくれたので、バスで三日かけてここまで来ることができたのです」と彼らは語った。

キャンプに参加したボランティアたちは時間を惜しんで慈済の理念や行住坐臥（ぎょうじゅうざが）の儀軌（ぎき）を学ぶほか、あるナミビアのボランティアは、帰国して家族に教えられるようにと、食事の空き時間

に『供養歌』の歌詞と意味を書き写していた。

モザンビーク式救援物資配付

南アフリカに別れを告げ、一行は華人ボランティア、蔡タイリン師姐（スージェ）とともに、飛行機で今回の行程の最終目的地モザンビークの首都マプトへ向かった。空港を出ようとすると歌声が響いてきた。四十名近い現地ボランティアが歓迎団を組織し、歌と踊りで迎えてくれた。互いに抱き合って出会いを喜び、情熱と感動の旅が始まった。

南アフリカの隣国モザンビークには、蔡師姐（スージェ）の先導により、すでに三千百五十名の現地ボランティアが活動している。今回私たちは、市の中心から車で約九十分の距離にあるマフボ・コミュニティ、二〇一八年二月にゴミ山崩落の発生したヒューレン・コミュニティでの二回の救援物資配付に参加した。

アスファルトの道路の他、レンガの道や泥道を通ってようやく市郊外にあるマフボ・コミュニティに到着した。支援世帯の人々は、既に木陰に並んで待っており、歓呼の声と歌で私たちを迎えてくれた。過去に参加した救援物資配付では、

ボランティアが決まった場所に立ち、生活保護世帯の人々が並んで物資を受け取るというものだったが、モザンビーク式の救援物資配付は、生活保護世帯の人々が地面に座り、ボランティアがかがんで物資を手渡すという形をとり、人々への尊重と礼儀を現した。救援物資配付前には牧師とともに人々が祈祷し、宗教的雰囲気の漂う中で、生活保護世帯の人々は精神と物質の両面で充実を得られたようだった。

ヒューレン・コミュニティでの救援物資配付ではまた別の感動があった。そこは首都の中心地に近く、空港から車でわずか十分の距離にあるが、豪華な別荘が立ち並ぶ近隣の海浜地区とは雲泥の差がある。生活保護世帯の人々が愛心米を受け取ると、ボランティアが竹筒を持って慈済の「竹筒歳月」について紹介した。驚いたのは、ほとんど全ての住民が、人助けに役立てたいと持っていた小銭をその竹筒に入れたことだった。

「慈済の家」やる気があればできる

蔡師姐（スージェ）によると、民生環境が悪く、また長い間植民地支配されていたため、モザンビークの人は一般に感情をあまり表

●モザンビークの集会所「慈済の家」は現地ボランティアのコミュニティ支援の拠点である。毎週様々なボランティアチームが精進し、簡素な仏堂の中で共に修行に励む。（撮影・林維揚）

に出さず、笑顔も少ない。慈済人が支援を始めてからはだんだん喜びを笑顔で表すようになったという。この点について最も印象深いのは「慈済の家」である。

「慈済の家」園区はマプト市にあり、一日精進を行っていた現地ボランティアたちは私たちの到着を知ると、列を成して歓迎してくれた。歌声の鳴り響く熱烈な歓迎に私たちは驚き喜んだ。

園区には、たわわに実ったマンゴーの木、整備された菜園があり、どれも無農薬の野菜や果物だった。ボランティアたちは自分の持ち物をまとめて木の下に置いて、菜園で水をまいていた。園区には、證厳上人が賛嘆する「世界最大の仏堂」と「世界最大の厨房」もあった。トタン板で建てられた仏堂には壁がなく、ボランティアたちは砂地に座り、外を囲むように何人でも座ることができる。

「慈済の家」では、台湾とビデオ会議をする準備が行われた。七百名近い現地ボランティアは半日かけて『勤行頌』の太鼓・鐘演繹を練習していた。皆、園区に落ちていた木の枝を拾ってバチとし、ボランティア蔡雅純の演技を手本にした。私たちの間のコミュニケーションは中国語をポルトガル語に訳し、それをまた現地の言葉に訳して行われた。言葉は通じないが、熱心に学ぶ雰囲気と、肢体の動きからあふれ出る道心を感じることができた。

アフリカで見聞きしたことは、驚きと喜びに満ちていた。現地ボランティアは自分の生活も豊かとは言えない中で、どうすればより多くの人を支援できるかと常に考えているのだ。現在という時間を大切に、積極的に奉仕すれば、安定と平和が愛の力とともに各地域の隅々にまで広がっていくに違いない。（慈済月刊六二六期より）

教室外の教室

モザンビークの公立学校の多くが教室、教師不足に直面している。

◎口述・呂秋霞（台湾慈済ボランティア）　まとめ・高玉美　訳・黒川由希

マプト国際空港に着いたのは深夜だった。十月三十日、ようやくアフリカ南部に位置するモザンビークにたどりついた。

凸凹だらけの道を車に揺られ、慈済が間もなく建設援助を行うヌドラベラ学校予定地に到着した。一行が道端の木陰でしばらく休憩していると、十数人の様々な年齢の子どもたちがのんびりと歩いているのが目に入った。腕時計を見ると午前十時を過ぎている。常識的には学校にいる時間ではないかと訝しんだが、四十年以上前に独立したモザンビークでは長い内戦により民衆の生活は困窮し、子どもが教育を受ける権利も国家の財政難による影響を受けているのだとボランティアが説明してくれた。

「義務教育は七年生までですが、校舎と教師が足りないので、公立学校の子どもたちは日中三部制授業で、各部三、四時間授業を受けています」。この答えに私は興味が湧いた。私たちが六千人以上の小学生が在籍するヌドラベラ学校を訪問すると、教室では前方の通路にまで子どもたちがあふれていた。

教室での唯一の隙間といえば黒板前のわずかな通路のみ、一番前に座る子どもたちは教師が歩く際に足が引っかからないよう、常に両足に注意していなければならない。それでも授業を聞く子どもたちの真剣な眼差しから、知識への渇望が感じられた。

一行が校庭を訪れると、教室の外の壁に古い黒板が掛けられており、子どもたちは地面に座って熱心に授業を受けていた。私たちの存在を少しも気にかけないようであった。その数メートル隣にはまた別のクラスがあり、教室外の「教室」を数えてみると、なんと三つもあり、同じように授業が行われているのだ。

遠くの大きな木の下に子どもたちが車座になっているのを目にし、最初は屋外

授業かと思ったが、そこも教室だった。子どもたちは車座で熱心に授業を受けていた。数メートル離れた場所の木の下では、教師がノートを訂正しているのを、子どもたちは行儀よく待っていた。

また一つ別の教室が目に入った。それは何枚かの布と鉄板で囲まれた空間だった。辺りは砂埃が舞い上がっており、布は砂埃防止用ということなのだろう。

一つの学校に様々な授業空間が出来ている。子どもたちは比較や選択を行う必要も、その術もない。学ぶことができるというだけで、充分にありがたいことなのだ。

現地の慈済ボランティアの蘇柏嘉は、三部制の授業の各部の入れ替わり時間は五分しかなく、百人近くの生徒が教室を出入りする際には、子どもたちの暗黙の了解と規律が試されるのだと言った。

車に戻ると、十数年前の九二一大地震による台湾中部の被災地を思い出した。民家や学校が倒壊し、子どもたちは木の下やテントで吹きさらしのまま授業を受けていた。そこで慈済は教育を中断させず、また保護者も再建に集中できるようにと臨時教室を建設した。三年の時を経て、慈済の建設援助した「希望工程」が傷ついた大地の上に聳え立ち、真新しく堅牢なキャンパスに教師や生徒を迎え入れた。

今再び長年の内戦を経たこの国のことに思いを馳せる。インフラは未だ整備中で、子どもたちの教育も有り合せの設備を利用するしかないのが現実だ。交流日程を終え台湾へ戻ってからもアフリカの子どもたちの澄んだ眼差しが脳裏に焼き付いている。彼らが台湾の子どもたちと同じように、安全で清潔な環境で成長できるようになる日が来ることを、心から願う。

（慈済月刊六二六期より）

●モザンビークの公立学校の多くが教室、教師不足に直面している。（撮影・蘇柏嘉）

時代が変わってもまだ昔の自慢話ですか？

◎文・李秋月（慈済教師懇親会ボランティア）絵・鐘庭嘉　訳・本諦

問

両親はいつも「自分たちの時は…」と口にしますが、時代が変わった今、彼らの意見は本当に参考にしていいものでしょうか。

答：確かに親はいつも昔のことを口にするものですが、それは子供に物の大切さを教え、時間を無駄にせず努力して欲しいからなのです。自分が子供の頃に家が貧乏だったことでろくに学校に通えず、仕事をしながらやっと卒業したことや、一人で稼いだ給料で五人家族を支えてきたことをどうしても伝えたいのです。

それを聞いている若者達は目を白黒させながら、「また昔話を持ち出されても、どんな様子かは想像できないし、今は能力がないと就職が難しい時代だから、二万二千元の低い給料ではとても五人家族を養えない」と内心で呟いていることでしょう。

そんな話を親から聞かされたくないのなら、逆に質問すればいいのではないでしょうか。経歴が広い親から学べることは多いはずです。質問が合っていれば、満足できる答えを得られるはずです。例えば父親がどんな仕事をして学問を完成したのか、どうやって学問と仕事を両立させたのかを聞けばいいのです。きっと両親も喜び、自分のためにもなると思います。

親にとって、今ほど子育てが難しい時代はありません。以前の子供は、言われたことは全て受け入れ、質問や反発はしませんでした。今の若者は、納得する理由がなければ逆に反論します。「時代が変わったから、昔のようにはいかない」と言われるに決まっています。

今の時代は親も家を出て勉強会に参加したり、親としての教育書を読んだり、親同士の座談会に参加したほうがいいと思います。子供と一緒に映画を

見て、内容について話すのもいいでしょう。同じ本を読んだり、コンサートに行ったり、ゲームをしたりすることによって、子供の生活に入り込み、彼らの考え方を理解しながら、温かい話し合いのできる家庭を作り上げましょう。子供もそれぞれの年齢で違う問題に直面しますから、子育ては一生の勉強なのです。

両親から愛の言葉ではなく道理ばかりを言われては、親子関係は疎遠になってしまいます。軽い冗談や物語などを用意しておくと役立ちます。ことわざも覚えておけば、必要なときに子供と話しであれば、きっと子供達は「また始まった。参考にする価値のない昔話だ」などとは言わなくなるでしょう。

親と子の関係は、正面から向き合えば、全ては改善されるはずです。お互いに歩み寄る努力をすることで、「昔話」や「反発」などの現象は無くなり、信頼関係も増していくのではないでしょうか。（慈済月刊六二六期より）

分かち合えます。例えば障害者でありながら社会で活躍している劉銘さんの「行動を妨げるのは手足ではなく、自分の考え方である」のような良い言葉は、いつでも誰に対しても使えます。

もし心から親子の対話を望むのなら、昔話を持ち出す代わりに、子供を精神的に励ます教育をしたいと思うはずです。温かみがあり、愛情の込められた

昔話を聞きたくないならば、質問を親に投げかけ、正しい方向に解釈しましょう。きっと納得できる答えが得られるでしょう。

【證厳法師のお諭し】

衆生と清らかな縁を結ぼう

◎訳・慈願　絵・陳九熹

人の苦難を開放させれば、感謝の見返りが得られ、
見返りを求めない奉仕で法悦に浸ることができる。
衆生と清らかな法縁を結べば、
同じ道を歩いて新たに道を開くことができ、
善行を行う菩薩仲間と成る。

今年の二月、ビルマ、マレーシアや台湾のボランティアたちがミャンマーで十日間に四万世帯余りに種籾の配布を行いました。彼らは帰国すると直ちに、精舎で配付状況を報告しました。疲れましたかと尋ねると、何時ものように「とても嬉しかったです」という返事でした。

去年の七月から八月にかけて、ミャンマーで大洪水が発生し、田園が水没して収穫前の稲穂が被害に遭いました。ボランティアが調査に行った時は水が退いた後で、水田には雑草が生い茂っていました。農民によると、元々借金

して農業をしていたところに、更に借金しないと農耕に復帰できないのです。彼らの身になって思うと心が痛みます。

水が退いた後は、来季の田植えまで何か月もあります。この時期を上手に利用することを思いつきました。どんな種でも植えれば、自然と収穫できるため、その収入で借金の返済ができるのです。そこで良質のグリーンピースの種を配付しました。再度ボランティアが種籾の配付に訪れた時、数か月前に植えたグリーンピースが豊作になっており、皆、喜んでいました。

ある農民によると、ボランティアの調査とはただ見に来るだけだと思っていましたが、二度も種の配付に来てくれたのは思いもよらなかったそうです。その上、ボランティアは身内のように彼らを抱擁しながら自分の力で立ち上がるよう励ましました。慈済の「竹筒歳月」の話しをして、人は誰でも人助けすることができるのだと諭すと、農民達は自分も毎日一握りの米を蓄えることで人助けができると分かり、その場で千人以上の人が登録すると米貯金用の御櫃を持って帰りました。

慈済の支援で農民の生活は安定し、

心が落ち着くと共に智慧も成長し、人々は互いに愛を伝え、この世に幸福をもたらそうとしています。

広い世間の中で、耳にし目に見える苦難に対して、人々は歩み寄り手を差し伸べていますが、その過程は困難で複雑なものです。それでも、この世の菩薩たちは結集し、心が揺らぐことなく、幾重もの困難を克服しながら遠きを厭わず利益も求めず、一途に人を救おうと、法で以って衆生を導き、人々の心に福徳と智慧を育んでいます。

これは経典の中にある理想の境地であるだけでなく、現実のこの世の菩薩道なのです。今生のこのような因縁を大切にし、時を把握しながら慧命を成長させなければなりません。

菩薩道は永遠に続き、断続的なものではありません。人の世が最も良い道場なのです。なぜなら最も煩悩を起こさせる所が人の世であり、様々な境地や味わいを感受することができるのです。仏道を志したからには一心一志に前進する人もいれば、中途で分かれ道から逸れる者もいるでしょう？または「自分はこれだけ奉仕したのにまだ満足してくれないのか。これ以上続けなくてはならないのだろうか？」「人助けし

ているのに批判されていてはやっていられない。止めようと思う」等と思う時もあるはずです。しかし、このまま止めたら自分にとっていいことなのだろうか、とよく考えてみてください。

もし、自分に対して自信が持てないなら、是非に対しても考えが定まらず、時が過ぎ去り、元の位置に留まったままです。「発心は容易でも長続きさせるのが困難」ですから、ああでもない、こうでもないと思うことは自分の妨げとなるだけです。縁に従がって古い業を消し、逆風を受け止め、気にせず、一歩ずつ譲れば何事もなく、道は広く歩きやすくなり、災厄も起きなくなります。発願すると共に尽力して奉仕し、なお且つ幾世にも亘ってそれを続けるのです。

修行の目的は自分を啓発することであり、人生を体得して道理を理解することです。煩悩無明は他人と自分の間に是非をもたらし、休まることなく業を積み重ね、それが結集してこの世の苦難になるのです。「道理に明るくない」ことが「無明」です。道理が分かれば、警戒を持ち、人との間で気まずい縁や悪縁ができてはいけません。人との関係は淡い水のようにあるべきで、それも清浄な法水であるべきです。

衆生を利する志を立てたなら、誰かが生活に困難をきたしていると聞けば、たとえ山を越えても甘んじて助けに行き、時間も体力も財力も費やして、その人に生きる望みを与えるべきです。もし病痛で医者も薬のない時は、速やかに治療を受けさせ、苦痛から解放してあげましょう。衆生の煩悩を取り除く手伝いをすると、お互いの心が清らかになるでしょう。

相手の苦難を解けば、感謝の心が生じ、発願してついて来れば、私たちは見返りを求めず奉仕するため、法悦に溢れます。それが福縁を結ぶということです。そして、その善縁や福縁が将来修行する時の糧になります。衆生と清らかな法縁を結べば、同じ道を歩み、共に道を切り開いて、善行をすることができるのです。共に菩薩を発心した道侶が菩薩仲間なのです。

人に助けられた人は人助けすべきであり、その見返りは善そのものです。常々、人々に善法を行うよう励まし、苦難を助け、善行するよう呼びかけ、世間に苦難が起きないよう努めるべきです。皆さん、心しましょう。

（慈済月刊六二九期より）

良い細胞を育てる

大衆を利する良い出来事はいつまでも心に留めておくべきだが、人を傷つける悪言や妄語は直ちに忘れるべきである。

◎文・釋徳仉／訳・済運

脳細胞を呼び覚ます

「以前訪れていた支部に行くととても懐かしくなるというのは、そこに歴史的な意義があるからなのです。台湾中部の慈済は発展し続けていますが、そこを起点として数多くの努力を惜しまない人間菩薩を輩出してきました。九二一地震が発生した時、そこが災害支援の指揮センターでした」。上人は以前の民権支部で二千人近い慈済ボランティアのために歳末祝福会を催し、九二一地震で多くの家が瞬時にして壊れ、慈済ボランティアが民権路支部に集まって支援や慰問活動を始めた話をしました。

「国内外の慈済ボランティアが各方面から支援にやって来ました。その時の光景は『法華経・従地涌出品』で菩薩が地から湧き出る場面を思い起こし、現実の情景が『法華経』の『経変図』になったのです」。

「人間菩薩は自分の安らぎは求めず、衆生が苦しみから逃れられることを祈って、汚染されていない清らかな大愛で以て見返りを求めない奉仕をしました」と上人は言いました。「人々に住む場所があり、心安らかに生活できたことを見届けることで一段落し、自分も落ち

着くのです。今準備を進めている九二一大地震二十周年の展示会の主な目的は教育と大衆への防災意識の提示です。それと共に人間同士の温かさを感じてもらい、愛で以て人助けすることを期待したものです」。

「来場の多くのボランティアはその時の災害と支援活動や復興の過程を経験しており、自分自身の経験から仏法の道理を検証できると思います。皆がその時の経験談として貴重な真実の一コマ一コマを語ってくれることを期待しています。また、その経験がない若い世代は、ネットで自分の興味がある情報だけを見て、真実や歴史的な大災害をないがしろにするのではなく、世を震撼させた災害が過ぎた後、世に警告を発する覚悟が必要です」。

慈済台中支部が移転した後、旧支部の一階ロビーは「慈済台中資料館」になり、数多くの慈済早期の歴史文物が展示されています。

昼食を終えてから上人は会場を見て回りました。バリアフリーの空間を法華回廊にするという絶妙なアイデアのもとに設計され、至る所で無言の説法が行われようとしています。

旧支部を離れる時、上人は皆でその環境を守ってくれていることに感謝し、「ここは台中慈済創設の場所で、初期の写真や映像を見ると記憶が蘇り、とても懐かしくなります」と言いました。

「接客室に来ると、そこで数々の志業が始まったことが思い出されます。狭い支部でこれほど多くのことを決め、善行を行なったのは実に容易ではありません。ですから、正しいことは自信を持って行えばいいのです。それによって今、これほどたくさん心温まる出来事を振り返ることができるのです」。上人はキャリアの長い慈済人たちに向かって、「脳細胞を呼び覚まして過去を振り返り、今を大切にして未来を成就するのです。菩薩道を歩む歩調を緩めてはならず、

絶えず智慧を啓発して慧命を延ばしてください」と激励しました。

感謝の気持ちを持つ

上人は、メディア関係者と今年開かれる九二一大地震二十周年の映像による回顧展について話し合いました。「これは人の情を募ったり、慈済がどれだけの仕事をしたかを見せびらかすためにするのではなく、教育のためなのです。そして、誰もが感謝の心を持つよう期待しているのです。感謝の気持ちこそが人の魂であり、人として感謝の心がなくてはなりません」。

「この二十年、人、事、時、場所、物などは思い返すことができますが、多くの人は自らそれを検証することができ、当時、撮った写真や映像が一番よい資料となるのです。そこに出てくるベテラン慈済人が映像の前で皆さんに、当時の事を話し、自分の一生を振り返って如何にして社会で奉仕し、自分の価値ある人生を肯定してきたかを語ってもらいたいのです」。

その後の中部慈済人懇親会で上人が触れたことですが、「いつまでも記憶すべきことと、直ぐに忘れてしまうべきことがあります。大衆を利する良いことは永遠に覚えておくべきで、人に対して無益や有害なこと或いは確かめられていない悪言妄語は聞いたその場で記憶から消し去るべきです。そうしてこそ良い脳細胞を育てることができ、無明を取り除いて慧命を成長させることができるのです。仮に無明が取り除かれておらず、依然道理を理解していなければ、悪意のある人が捏造した言論を聞くと直ぐに煩悩を起こしたり、それを第三者に伝えることで益々多くの悪業を作り、より多くの悪癖を積むことになるのです」。

皆が良い言葉を口にし、良い考えを持つ習慣を身に付け、無明に釣られた行動をしてはならない、と上人は諭しています。九二一の回顧展は教育のためであり、人々が自分を戒めて敬虔になるよう促すのが目的です。また、上人は当時各地から愛が結集したおかげで、台湾社会があのような甚大な災害後にも関わらず早急に安定して再建ができたことに感謝しています。

「慈済が社会で得て、社会に還元しているのは『自分の無私を信じ、誰もが愛を携えていることを信じている』からです。よって、すべき事は直ちに行動に移しており、もし、力不足であれば、社会に向かって愛の結集を呼びかけ、人々の先に立って行動してきました。それは過去も現在も変わっていません。未来もこの善と愛が途切れることなく続き、愛のエネルギーが途切れることがないよう願っています」。（慈済月刊六二八期より）

百の流れは海へと帰る

呼吸しているだけでも感謝すべき

生命とはこれほど脆弱なもので、一旦、呼吸が止まれば、死がそこに来ている。然しながら生命の喜びを呼吸を通して感じ取り、全ては呼吸に回帰するという、最も基本的で現実的な現象に戻って、その些細な動作に満足し、感謝すれば、生命の喜びと感動が得られるはずである。

◎文・林建徳（慈済大学宗教及び人文研究所教授）訳・常樸

ＡＬＳ患者が苛まれる病の苦痛は一般の人には想像すらできない。もし、地獄に十八層あれば、彼らは十九層に身を置いている、とあるＡＬＳ患者が

百の流れは海へと帰る

表現したことがある。

ある重度のＡＬＳ患者は全身を動かすことができない上に、気管切開していて、会話にも大きな支障が出たため、ただ「キーワード」でコミュニケーションをしていた。かつて彼はインタビューの中で「呼吸しているだけでも感謝すべきです」と言った。それは幾多の苦難に苛まれて体得した、代償の末に悟った言葉である。

だが少くなくとも呼吸しているということは、まだ生きている意味があり、人生の希望を最低限に抑え、生命の本質あるいは原点に戻って何も求めず、ただ生きていて良いということなのである。生きていることは最大の幸福であり、それ以外の何物も重要ではない。

「呼吸しているだけでも感謝すべきです」呼吸できることに感謝している人がどれほどいるだろうか。例えば、炭鉱の鉱夫が深い地中で仕事している時、一旦事故が起きると、酸欠で窒息死したり、ガスを吸い込み過ぎて死ぬこともある。或いは自身の健康に問題があって、口や鼻、肺などの呼吸器系統の病から、呼吸が出来なくなって死に至ることもある。

「生命は呼吸の合間にある」。生命はこれほど脆く、一旦呼吸が止まれば、死はそこに来ている。だが命の喜びも呼吸を通して感じ取ることができる。例えば、仏教の座禅の一つである「安般念」（「安那般那念」の略）即ち「数息観」（「呼吸を数えて精神の統一・安定を図る」パーリ語でānāpānasati）は有効な方法である。小さな動作から大きな結果が得られると『雑阿含経』にも書かれている。

即ち、人生のあらゆる行いは全て呼吸という最も基本的な営みに帰するのだから、その些細な動作を有しているだけで満足し、感謝すれば、生命の喜びと感動が得られるはずである。（慈済月刊六二六期より）

骨髄バンクで繋がる愛

病と共に生きる

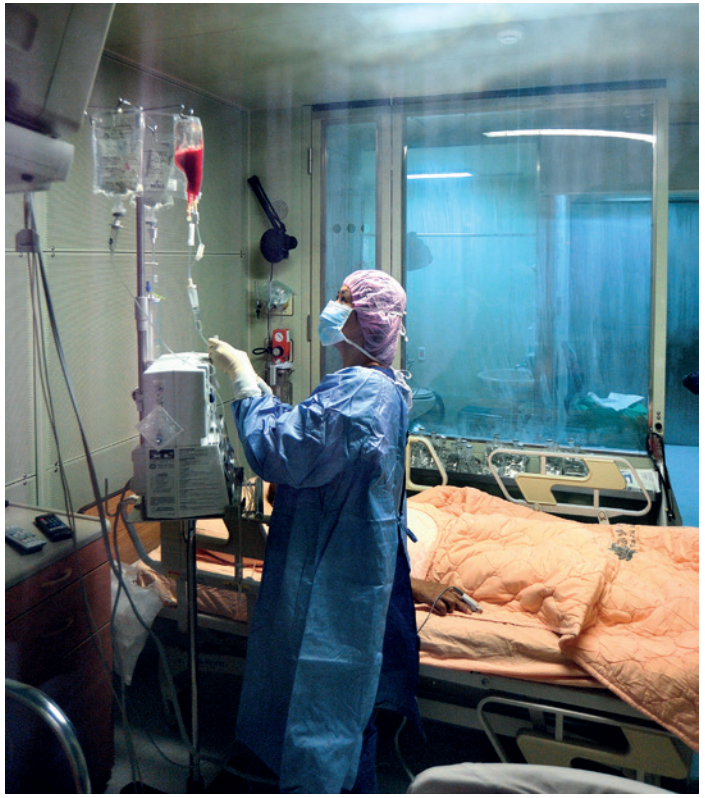
慢性骨髄性白血病に二つの治療法

◎文・李委煌　撮影・蕭耀華　訳・葉美娥

大部分の慢性骨髄性白血病の患者は、分子標的治療薬で病状が抑えられる。そして造血幹細胞移植は病気の進行を食い止める第二の予防線であり、患者に生きるチャンスを与える方法といえる。

二〇〇七年十月、元来肌の色が濃い曾詠恩は、黒ずんできたようで、しかも体重が大幅に減り、お腹の脾臓部分のふくらみが触って感じられるほどだった。病院にて血液検査を行った結果、白血球指数が標準の二十倍にもなっていることがわかり、血小板の数もひどく低下していたため、「慢性骨髄性白血病（以後CMLと略す）」と医師に診断された。一種の悪性血液疾病である。

●21世紀初めに分子標的治療薬が登場する前の慢性骨髄性白血病の主な治療法は、まず患者に化学療法の投与を増やし、その後骨髄移植を併用することであった。



当時の医療分野には、すでにこの白血病を専門に治療する「グリベック(Glivec)」という分子標的治療薬があり、高価な治療薬だが、臨床試験では効果が明らかになっている。「心配いりません。この薬を飲めばそれで十分です。効き目は優れていますよ」という主治医の話を聞いて、香港に住んでいる曾詠恩と主人はほっとした。

薬の費用は毎月一万八千香港ドル（約二十五萬円）かかる。しかも「一生飲み続けること」と言われた。しかし半年飲み続けても薬の効果は現れず、医師をうながせた。早速骨髄を採取して検査した結果、曾詠恩の体内には同時に「多發性骨髄瘤」という別種類の白血病が発症していたのだった。これも悪性血液疾病である。

医師の話では、これは特別な病気で、全世界わずかに十症例しかなく、香港には彼女の症例だけだった。その後香港大学の医学院も、曾詠恩の症例を医学教材に取り入れた。

分子標的治療薬が効かない以上、骨髄移植だけが命が救えるのだと考えられ、曾詠恩は早速造血幹細胞移植を受けたが、一年も立たずに病気が再発した。やむを得ないが、骨髄バンクで身内でないドナーを捜すしか方法がない。それが最後のチャンスだ。

天は人を死に追いやることをしない。唯一の生きるチャンスは、慈済骨髄バンクで見つかった。面識のない人のヒト白血球型抗原（ＨＬＡ）が曾詠恩と一致したのだ。

ガンと五年以上も闘い、毎週病院にて血液検査を受けてながらも体が回復に向かわなかった曾詠恩だが、二〇一三年一月の始めに、やっとこの身内でないドナーからの造血幹細胞移植を受けることができた。長年ガンに蝕まれた後ようやく生きる道が開けたのだ。移植を受けた年、彼女は五十三歳だった。

骨髄寄贈に関する統計（2018.11.30 現在）

慈済骨髄幹細胞センターは創設されて二十五年、国内外で五万人余りの各種血液疾患患者のために白血球適合を模索してきた。

- 適合模索総数：57,167 人
- 寄贈志願登録者総数：2,429,886 人
- 骨髄及び末梢血移植数：5,180 件
- 2018 年度骨髄幹細胞移植：4 件
- 2018 年度末梢血幹細胞移植：295 件
- 骨髄を提供した国と地域数：31 国

資料：慈済骨髄幹細胞センター提供

命を救う薬
「買うには家を売るしかない」

台湾慈済骨髄バンクが成立して、もう二十五年が経つ。発起者はアメリカから台湾に帰った華橋である温文玲という慢性骨髄性白血病（以下ＣＭＬと略する）患者だった。彼女は分子標的治療薬がまだ開発されていなかった当時、台湾あるいは中国にさえも骨髄バンクの機関は全く存在していなかった。それに、例え一致した人が見付かっても、台湾の「人体臓器移植条例」に縛られ、自由に骨髄を移植するのは難しい時代だった。

異常な染色体によって遺伝子が傷つくことで発症すると考えられるＣＭＬは大人に多く、一種の慢性ガンである。初期の病状は風邪と似ているが、有効な治療法を採用していかないと、数年以内に病状が更に悪化してしまう。統計によると、台湾では毎年新しく約二百名の症例が発見されているそうだ。

二〇〇〇年までに、ＣＭＬ患者への治療はほとんど「骨髄移植」とされ、ほかには完治する方法が無いと言われていた。二〇〇〇年になって分子標的治療薬が登場すると、骨髄移植はＣＭＬの次に行う第二段階の治療法と考えられるようになり、ＣＭＬは薬物で治療して正常な生活や仕事に戻れる「慢性病」に変わったのである。

台大病院の血液腫瘍科の唐季祿医師は、現在「グリベック」という分子標的治療薬が白血球の異常細胞だけを狙い撃ちしその他の正常細胞を破壊しない唯一の治療薬であり、患者は病状が落ち着いた後は治療しながら仕事ができるようになると強調した。

九割の患者はある期間この薬を飲んだ後、病状が大幅に緩和された。ただ残念ながら、この薬はそれほど安価ではない、毎月の薬代が約二十五萬円近くに上り、しかも長期間で服用しなければならない。

幸い台湾は十数年前からグリベックが国民保健の給付薬品項目に登記された。それにより「買うなら家を売るしかない」という伝説が消えることになった。

造血幹細胞の移植が
第二の予防線に後退

曾詠恩と同じ香港のＣＭＬ患者である彭望棣は、発病の年は二十歳にもなっていなかった。当時の香港では、グリベックは人体試験薬として無料で提供されていた。彭望棣は二〇〇二年からこの薬を

●高齢者の移植治療と言われた曾詠恩（右）は、２０１８年末ようやく長年の願いが叶えられた。香港から来台し、命の恩人楊淳惠に感謝した。

飲み始め、六ヶ月後効果が出て、脾臓の肥大状況も大分改善した。しかし、試験薬の不確定要素もあるので、やはり骨髄移植が根本的な治療方法だというのが医師の勧めだった。幸いにその年に台湾の慈済骨髄バンクにて一致したドナーが見つかり、すぐに移植を実施することができた。

花蓮慈済病院の幹細胞精密医療研究開発センター主任の李啓誠も血液腫瘍科の医師である。彼は正直にこう語っている。ＣＭＬ患者にとって、もし台湾のような国民保健がなければ、あるいは頼れる個人保険や経済力がないならば、確かに長期的に分子標的治療薬を服用するのは難しいので、その際は骨髄移植の道を選ぶしかなく、それに分子標的治療薬の効果が見られない一部の患者にも、骨髄移植を勧める必要があるのだと。

台湾海峡を越えて恩人にお礼をする

二〇一八年十一月三日、曾詠恩と彭望棣の二人は、家族に付き添ってもらって遠路はるばる香港から飛行機で来台北し、彼女の命の恩人に感謝を表明し、対面の儀式でお互いの健康を喜び合った。

曾詠恩は六年前のことを思い出していた。待ちに待った鮮やかで紅色の造血幹細胞が夜中二時過ぎ頃病院に届き、一刻の無駄も無く直ちにに彼女の体内に移植された。その時彼女は自分で誓ったのだ。必ず生きて退院することを。当時息子がまだ十五歳だったのである。

移植前まず化学療法の投与を増やし、曾詠恩は三日間の内に四百錠の抗がん剤を飲んだ。その副作用により髪の毛が落ち、喉に潰瘍ができてしまった。「水を飲んでもガラスを噛むように突き刺さるので、薬を飲むことなどできませんでした」だがいくら辛くても努力して食事を摂り、短い時間で退院にこぎつけた。ド

●２１歳で骨髄移植を受けた彭望棣は（中）、１６年後香港から来台し、彼女に生きる道を与えてくれた恩人の許倫維（左１）とやっと対面した、２人の年齢はほぼ同じぐらいだった。

ナーについて当時知らされていたことは台湾在住で二十三歳の楊さんという名前だけだった。

曾詠恩より少し早く移植を受けた彭望棣は、移植の年に、オーストラリアの骨髄バンクに一致した人を見つけたが、相手から骨髄をもらえなかった敬虔をしていた。その後台湾の慈済骨髄バンクでドナーが見付かったが、その造血幹細胞が既に飛行機にあると確定するまでは、安心できなかったそうだ。二〇一八年骨髄授受者対面式で、彭望棣はやっと自分より年下の命の恩人である許さんと出会うことができた。

骨髄移植の医療技術は絶えず前進を続けている。分子標的治療薬もまた然りである。私たちが望んでいるのは、ＣＭＬ患者の治療薬だけでなく、その他の種類の血液ガン患者にも効果のある治療薬が開発され、さらに患者たちの薬代が負担可能な価格であってほしいということだ。それが実現すれば患者と家族にとって至福が訪れることになるだろう。

（慈済月刊六二六期より）

素晴らしい人

許倫維が骨髄を提供したことに、ボランティアが賞賛しました。「自分の子供が風邪をひいただけでも心が痛みますから、患者とその家族の長い苦労がよく分かります。数えきれないほどの治療に打ち勝ってきた患者こそが一番素晴らしいと思います」と彼は言いました。

◎文・黄愛恵＆曹恵雀　訳・明陛

香港の女性、彭望棣は二十歳になる前、慢性骨髄性白血病と診断され、どうしたらいいか分からなくなりました。しかし、骨髄ドナーの無私の愛が絶望していた彼女の暗い人生を一転させました。今では自由自在にどこへでも行くことができ、健康に対する心配はなくなったのです。彼女の家族はどうしても台湾に行ってドナーに感謝したいと思いました。

骨髄のドナーである許倫維は高校の時、街で慈済が骨髄寄贈登録活動を行っているのに遭遇し、彼は友達と共に採血してもらって登録し、その二年後、適合通知を受け取りました。彼の母はドナーになることを心配しましたが、幸いにも大愛テレビで『髄縁』という番組を放送していたため、一回目から内容をメモし、遂にあらゆる心配がなくなりました。あとは息子に栄養を与え、もっと健康になって人助けできるようにすることでした。

当時まだ若かった倫維がそのような重大な決意をしたのは、母親の大きな後押しがあったからでした。彼女はいつも息子に、「あなたの体はもう一つの命に繋がっているのだから、バイクに乗る時は気をつけて、飲食でも衛生によく注意しなさい」といい聞かせていました。

息子が骨髄を提供するために飛行機で花蓮の慈済病院に行く時、母親は手紙を渡しました。それには「その患者さんに比べると私たちはよほど幸せです。飛行機の中でも、手術台の上でも、どこに行く時でも心の中で『阿弥陀仏！』を唱え、礼儀正しくしなさい。あなたの帰りを喜んで待っています」と書い

てありました。

二〇〇二年六月十四日、倫維の手術は無事に終りました。彼の誰かを救いたいという切実な思いは恐怖心に打ち勝ち、手術を普通の献血だと思っていました。それよりも、手術の前夜、一枚のハガキを患者に送ろうと思い、長い間、考えてこう書きました、「心からあなたの世話をした人たちに感謝してください」。

倫維が出発する前、母親はわざわざ新聞紙で丁寧に包んだものを證言法師に渡すよう息子に託しました。法師が開いてみると中には六万元が入っていました。その金額は一人親家庭にとって決して少ない金額ではありません。

ボランティアが倫維の勇気を褒めると、彼はいつも「患者さんこそ素晴らしい。あらゆる治療を乗り越えてきたから」と言います。「子供たちが風邪をひいただけでも私は心が痛むのです。ましてや長い間、白血病と戦ってきた苦労は想像に絶します」。

まるで遠くに住んでいる家族のように、彭望棣の両親は許倫維をきつく抱きしめました。彭望棣は許倫維が彼女に送った祝福カードを携帯電話に残していると同時に、自分もカードを作って記念として許倫維に送りました。そして、感動に震えて涙を流しながらこう言いました、「このご恩は一生忘れません。私の友達もあなたの苦労に深く感謝しています。なぜならあなたの勇気のお陰で、彼には今でも私という友達がいるのですから」。

（慈済月刊六二六期より）

●同じ年ごろの彭望棣（前列右）と許倫維（前列左）は「喜びの出会い」活動の後のお茶会で、互いにこの十年余りの生活などを話し合った。（撮影・張晏瑜）

聞・思・修

仏法をよく学び、心に染みわたらせ、しっかりと実行する！

「捨」の練習

◎文・潘翠微　訳・慈願

私は一人だけの時間を過ごすのが好きなため、精舎に帰るとまず自分の空間を持たないようにと心掛けている。甘んじて時間を奉仕し、執着心をなくすことである。反復する労働で私がやっと気が付いたのは、喜びとは自分の欲望を満たすことではなく、見返りのない奉仕をするということだった。

炎天下の夏は太陽が照り続け、汗が止めどなく流れる。暑い日差しの下、目を細めて静思精舎で歩いていると、「炎炎の夏日に眠気が襲う」という文句が頭に浮かんだ。

「春は読書の季節ではなく、炎炎の夏日は眠気がさす。秋が過ぎて冬が到来し、書籍をしまって残りの日々を過ごす」これは明の時代の才子、馬夢龍編纂の『広笑府』の中の「読書が怖い」という一篇の詩である。小さい時から読書好きの私は、なぜ読書が怖いのか全く理解することができなかった。その上忙しい精舎の生活の中で、もっと法を復習する時間があることを望んでいるのに、読書が怖くないだけでなく、逆に「時間が足りない」ことを心配していた。

精舎に帰って證厳法師に従って修行する前は、繁華街であらゆる種類の人間や出来事が起きる香港に住んでいた。仕事で忙しい一日が終わって家に帰ると、ただ自分の時間を持ち、テレビを見たり読書したりして過ごした。

五年余り前、精舎に来た時はあらゆる事が新鮮に感じられると同時に不慣れだった。毎日精舎の生活に慣れようと模索しながら、昼間は仕事に専念し、週末は常住尼僧たちに着いて畑仕事をした。夜は時々、大部屋で皆と話し合って感情の交流を深めるため、読書の時間を探すのはとても困難だった。

困難は心に法がないからであり、修行の真義を理解していなかったからだ。その上当時、私は台湾語が分からなかったので、焦るばかりだった。

ある日、法師が静思晨語で「六度」、「四摂」を解説していたが、私にとって非常に役に立った。「六度」とは、自分の内に対して布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧を促し、「四摂」は外に表れる積極的な奉仕、布施、愛語、利行、同僚を悟りに導く行為である。その時から私も生活の中に取り入れることを試みた。

「六度」は布施が最たるもので、私は「捨」から学び始め、自分の時間を切り「捨」て、我執を取り除くことを練習した。利他を優先し、頷いたり会釈し、ちょっとした人助けするのも全て「捨」から始るのである。

捨の練習をしていると、何時しか日が過ぎ去った。ある日、朝食を済ませて食卓を拭いていた時突然、こういう生活が本当の修行であり、全てが日常的で雑念がなく、只ふきんで食卓を拭くことだけに心を配っていると感じた。真の喜びとは自分の欲望を満足させることではなく、見返りのない奉仕から得られるものだった。

生活は当たり前のことではない

見返りを求めないと言えば、「一日働かねば、一日食せず」という言葉から、常住師匠たちの苦労と恨みも悔いもないことに感心させられる。以前好奇心から、ある常住師匠に、「こんな炎天下で辛い畑仕事に耐え、笑顔を浮かべられるのは簡単なことではありませんね」と言ったことがある。

師匠は笑って、「畑仕事は私たちの生活に欠かせないことを教えてくれるのです。炊事したり野菜を植える人に感謝し、その福を大切にしなければなりません。座って口を開ければご飯が来て、手を伸ばせばお茶があるのは当たり前ではありません」と言った。

精舎へ帰って間もない頃、二年に一度の盛大な行事である、ウコン掘りがあった。都会育ちの私にとって見逃すことのできない出来事だった。高ぶる気持ちと共に作業服を着て、午前八時から六時間掛けてウコンを掘り、それを車で運んで天日干しした。

昼は食堂で食事してから食器を洗い、午後は野菜を植えるために土を耕し、苗を掘り起こして手押し車で畑まで運び、植えた後には水やりをした。

一輪車を押して上り下りしているととても疲れた。午後三時の太陽は熱く、編み笠を被っていても頭が膨れ上がるような感じだった。重くて車輪の空気が足りなかった一輪車を一気に坂道の上に押した後、諦めたい気持ちになり、「今日来たのは間違いだった」という言葉が頭に浮かんだ。

●旧正月の間、ボランティアは静思精舎に帰り、新年を迎え、常住師匠と一緒に野菜畑で雑草抜きをした。（撮影・彭珮瑋）

しかし、直ぐに頭を切り替え、意志の力で続けた。というのも、常住師匠たちが毎日、野菜畑で重労働し、黙々と全世界の慈済人の家を守っているのを見ると、自分だけが試練に耐えられず、直ぐに諦めてはいけないのだ。その日、夕方の五時まで働き、体は疲れ切っていたが、気持ち的には大きな前進だった。

畑仕事は精舎での日課の一つに過ぎず、「清修士」（注）の寮や公共区域の清掃は三六五日行われており、私が割り当てられたトイレ（浄房）掃除は合計一ヶ月にも満たず、後の十一ヶ月は他の人の奉仕に頼っていたのだ。本当に感謝に耐えない。（注：出家前の修行者）

私が浄房に入った時、「観身不浄」を体得しただろうか。臭いで眉間に皺を寄せたのではないだろうか。他人がしてくれたことに感謝してこそ、物を愛し、大切にすることができるのである。万物、四大元素による結合は借りのものであることを理解して初めて執着心がなくなるのである。

専念して働く

私は気持ちの切り替えをしなければならない時、野菜畑に行って散歩する。ある日、台風が去った午後に畑に続く道を歩いていると、遠くの方で一人の師匠がスコップで土を掘り起こしていた。以前、その区域は背の高いトウモロコシが生えていて、収穫後は葉が残っていたはずだったが、師匠は何をしているのだろうと思い、声をかけた。「師匠、お手伝いしましょうか」。「そうですか、丁度モロヘイヤを掘り起こして別の所に移すところでした。手伝いに来てくれてよかった」。

台風の影響で、畑仕事をするはずの常住尼僧たちが野菜のよりわけをする区域で仕事をしていた。その師匠は他の

尼僧たちに休んでもらい、自分一人で苦労していたのだ。私は野良仕事の身支度をしていなかったが、構わず、その滅多にない機会を逃してはならないと思った。

トウモロコシを植えていた畑には以前、モロヘイヤを植えたことがあり、何本か自然に芽を出していた。師匠が約二十株のモロヘイヤの苗を掘り起こし、私は泥付きの株を一輪車で畑に運んだ。そして、師匠が穴を掘り、私が土に水をやり、更に一緒に土を被せ、踏み固めた後、水やりをした。

白い靴は泥にまみれ、パンツの膝から下も泥だらけだったのも気にせず、両手は蚋にいっぱい咬まれ、指の股は黒い泥で汚れていた。大自然の中で師匠と修行や自分の浮ついた情緒について話し、雨が上がった後の新鮮な空気を吸うと心がリラックスできた。

師匠も私と同じで、自分は怠惰でもっと頑張らなくてはという想いで、午後、野菜畑に来て考えていたのだった。師匠は、「忙しい精舎の生活の中ではことさら朝の修行の時間を大切にし、専念して法語を聴かなければいけません。畑仕事している時は手足を動かしていても、心の中で修行し、法の中にある真義を反復して、生活の中に運用してみるのです」と言った。

私がここで師匠に会うことができたのは前世の良縁と信じ、この一刻の話し合いと励ましあいは私の善知識となった。私は法師がかつて「縁とは何世にも亘って続くもので、あなたが与えた愛や慰めの分だけ、その人はあなたのことを心に記憶しているのです。あなたのその良い種は、その人の心に植え付けられます」と話されたのを思い出した。

五時半まで仕事を続け、足取り軽く寮に戻った。何時の間にか雲はなくなり、美しい夕日はなかったが、青空に白い雲が所々に浮かんでいた。心の中でその師匠に感謝し、もっと頑張らなければと思った。

炎天下でも心の中にそよ風が吹く

以前、友人が私に、もし選択できるなら何になりたいかと聞いたことがある。彼女は鳥になって大空を思う存分飛び廻りたいと言った。私は樹になりたいと答えたように覚えている。その原因は簡単で、黙々と立って人々に木陰を与えたり、雨を凌いでもらうことで頼られたい、と思っていたからだった。

大樹は一粒の種から芽を出し、縁が集って逞しく成長する。同様に発心立願した菩薩は縁あって仏法を聴き、努力して精進善行すれば，伸びた枝や葉が剪定されるように、この世における試練を受

けて習気や我執をなくし、おのおのが異なった外観を成した大樹として人々に涼を取らせることができるようになる。

どうすれば堅固で倒れず、根が深く張って大きな枝を伸ばす大樹に成長できるか？私は慈済という大来な環境の中で、努力してより多くの機会と空間を見付けて奉仕し、「四摂法」を実践したいと思っている。

「四摂法」は布施に始まる。法師は、「人と良縁を結んで常に人を助けることが即ち『布施』。大衆の世話をし、互いに助け合い愛し合うことが『利他行為』。愛の言葉で慰めることで人の心を広くして煩悩をなくせば、お互いに励まし合うことができ、それが『同事という仲間』です」と開示したことがある。

人と一緒に事を成していて困難に遭った時、「四摂法」を思い出し、続けられるだろうかと自問していた後、頑張って試練を乗り越えるようと努力した。それと同時に「布施」という善行、「持戒」による徳の修行、「忍辱」による縁の転換、「精進」して格上げすること、「禅定」で自在になること、「智慧」の成長を着実に行い、生活の中に取り入れることは即ち、自利・利他である。

「春は慇懃に心田を耕し、夏はこの世の煉獄に入り、秋は精進して誓いを立て、寒い冬に福慧の豊作を得る」。人生の出会いは全て一時の縁である。修行の道でことさら、困難に遭遇することで心を修行する機会に恵まれたことに感謝しなければならない。ことごとの機会に心を練るのだ。炎天下の人生ではより多くの忍耐と苦労が必要だが、心の中にそよ風が吹けば、自ずと涼しくなり、あらゆる事が法である。（慈済月刊六二五期より）

●精舎の野菜畑で三輪自転車で野菜を載せる。常住師匠は心を合わせて互いに協力し、一人は前で引っ張り、一人は後ろから押し、野菜を運んでいた。（撮影・黄筱哲）

真心あふれる映像

花蓮の皆さん、お元気ですか？

文＆撮影・余自成　訳・閻麗妮

二〇一八年二月に起こった災害支援のため、自分の貯金を寄付したシリア難民の子供、ムハンマド・セホ。「買いたい物があってお金を貯めていたのですが、台湾の花蓮に地震があったと聞いたので、全部寄付しました。被災者の支援は急ぐからです」と語った。

ムハンマドは家族と一緒にトルコに避難し、慈済の支援校エルマナヒル学校に入学した。去年の六月、新学期が始まるとＡＳＵＳ基金会が二度目のコンピュータ寄贈を行った。小学三年生のムハンマドはコンピュータ室に入った時、これらの新しい「友達」を目にした途端、大喜びした。

最初の授業で先生は「ペイント」の使い方を教えてくれた。ムハンマドはシリアの人々に住んでもらう家をたくさん描き、「そこでは人々が怪我をしたり家を失ったりしたのです。僕は絵を書き続けます。家が必要な多くの人に住んでほしいのです。お金は全く受け取りません」と言った。

（2018.6.7 トルコ）

彼に、ノートパソコンを買うためにコツコツと貯めてたきたお金を寄付するのは惜しくなかったのかと聞くと、彼は「いいえ、花蓮の住民がまだ必要なら、僕はまたお金を貯めて寄付します」と何のためらいもなく答えてくれた。それだけでなく「台湾の皆さんは元気でお過ごしですか？」という気遣いを見せた。

（慈済月刊六二七期より）

❑静思語

社会の現状を憂慮するより、
自信を持って
愛を奉仕するべきである。

絵・蘇芳霈

慈済大記事四月

訳・済運

◎慈済基金会はアメリカ赤十字社と２００８年の合意内容を更新した。将来の防災と準備、災害支援、被災後の再建など多項目にわたって合意し、慈済アメリカ本部の黄漢魁執行長と赤十字社のトレバー・リゲンシニア副主席が代表で覚書にサインした。

◎慈済アメリカ本部慈善発展室は１日から３日までサンディマス志業パークで緊急災害支援研修講座を催した。台湾から慈済基金会慈善志業の顔博文執行長をはじめ、全米各地のボランティア３０人が参加し、１日目はロサンゼルス市緊急対応センターを訪れ、２日目は連邦緊急事務局（ＦＥＭＡ）と全米緊急災害支援ボランティア団体（ＮＶＯＡ

０４・０１

D)、赤十字社などの代表及びカリフォルニア州政府人員11人と意見交換をした。そして、3日目は慈済内部の共通認識や意見交換の座談会が行われ、慈済の緊急災害支援や中長期復興支援、再建する地域社会で根ざすこと、資源の相互補完などにおいて直面した困難とその後の展望などを話し合った。

04・04

◎慈済南アフリカ支部ダーバン国際ボランティアチームとヨハネスブルグ慈済ボランティアの一行8人は、4日から8日までザンビア共和国で初めて支援活動を行った。現地のカマンガ・コミュニティとマシア・コミュニティ学校を訪れ、貧困世帯を見舞うと共に、将来、慈善活動を行うに当たって現地の代表を訪問した。

◎慈済基金会慈善志業の顔博文執行長はアメリカ・ニューヨーク・マンハッタン慈済大愛人文センターでグリーンフェイスとマンデー

キャンペーン、ユニテリアン・ユニヴァーサリスト協会などの団体代表と会見し、菜食を広めてきた経験を分かち合った。また、シエラレオネ駐国連大使、バハイ教国際地域協会代表と慈善救済活動の現況について意見を交換した。

04・05

◎慈済基金会慈善志業の顔博文執行長と職員の黄恩婷は慈済ニューヨーク支部のボランティアと共に国連本部を訪れ、モザンビークとマラウイの駐国連大使を訪ね、両国のサイクロン・イダイ被害の支援活動で協力し合う可能性を探った。

◎慈済ジンバブエ、サイクロン・イダイ災害支援チームは5日と12日、15日にチマニマニ町、コパ区のジンギレ小学校、ザカ区でおのおのトウモロコシの粉と毛布、浄水剤などの物資を配付した。

04・07	モザンビークのサイクロン・イダイ災害支援活動で、慈済ボランティアは7日から21日までンハマタンダ地区のンハマタンダ村、ティカ、セデ、メトウシラ、メテンガなどの村でトウモロコシの粉と豆、食用油、浄水剤、日用品など7600世帯に物資の配付を行った。
04・10	花蓮慈済病院は国際合作発展基金会の「友好国医療人員訓練計画」に参加し、本年度の「スワティニ妊婦と乳児の保健機能向上計画（2期）」が10日に幕開けした。スワティニから来た6人の産婦人科医と助産師は23日から花蓮慈済病院において、4週間から6週間に渡る医療訓練を開始した。
04・13	慈済はアフリカ、マラウイ のサイクロン・イダイ被害者を支援するため、13日はンサンジェ・ンポンバ避難所で603世帯、14日はチ

	クワワ・ムロンボ避難所で32世帯に合計620キロのトウモロコシの粉を配付した。その他、3月半ばからチンゴンベ部落への支援として煉瓦造りの家の建設を始め、今月19日までに31棟を完成させた。
04・19	マレーシア、サンボワ州の鄭女史は悪性皮膚繊維肉腫を患い、顔面に大きな腫瘍ができて苦しんでいたが、2018年12月下旬、マレーシアの慈済ボランティアと彼女の家族の付き添いの下、花蓮慈済病院に到着し、7回の手術を経て、今日、元気に退院した。
04・24	アフリカのモザンビークとジンバブエ、マラウイは3月にサイクロン・イダイに襲われ、大きな被害が出た。慈済基金会は支援活動を展開し、世界各国で愛を募る募金活動を発起し、今日までに55の国と地域で行われている。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779/886-3-8059966
志業中心（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段２４８号
TEL:886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店區建國路 279 号
TEL:886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ハワイ支部（Honolulu）
TEL:1-808-7378885

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス London
TEL:44-20-88699864

フランス Paris
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈済

２０１９年５月１５日発行・２６９号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・陳植英・王麗雪
校　閲　黒川章子
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）

最高の笑顔　竹筒歳月シリーズ

ミャンマーのクンニャンゴンで慈済は「お帰りなさい米貯金箱」という日を設けた。家庭で毎日貯めている「一掴みの米」を持ち寄る日である。今月も二人の子供が嬉しそうに寄付していた。毎月集められた米はボランティアが整理、袋詰めし、それを必要としている生活困窮者に届けられる。（ミャンマー米貯金箱に関するすばらしい物語は次号「270 号」の特別報道で特集する）（文＆撮影　蕭耀華　ミャンマー・ヤンゴン省　2019.3.3）

慈済ものがたり